

今を  
読み解く

国際基督教大学教授  
森本 あんり

日本の最重要相手国アメリカを理解するのは、簡単なようであらう。理由の一端はその宗教性にある。たとえば昨年1月のオバマ大統領就任式の報道では、テレビ中継の通訳者は「主の祈り」を知らず、新聞社はアメリカ愛国歌の誤訳を掲げ、パルマンとヨーヨー・マの演奏する曲に二つの賛美歌がアレンジされていることを指摘した人はいなかった。これでは人々があの就任式にどのような意味を込め、どのような思いでそれを見つめていたのかを理解するのは困難だろう。

民主主義は、大衆の心に語りかける言葉が必要とする。アメリカの政治家たちの言葉は時に強いアピール力をもつが、それは彼らが歴史的伝統に培われた宗教や象徴の喚起力を駆使するからである。「今を読み解く」ための鍵は、その「今」という断面図を構成する歴史に隠されている。

●差別と対立の歴史

アメリカの歴史を大きく左右してきた二大要素は、宗教と人種である。マーク・A・ノール『神と人種』（赤木昭夫訳、岩波書店・2010年）は、建国期の奴隷制からオバマ大統領誕生まで、アメリカ史がいかにこの二本の縦糸で織りなされてきたかを解明してくれる。著者によれば、それは宗教に規定された差別と対立の歴史である。ア

アメリカ史 左右する宗教



共和党的な「小さな政府」論にも、この二勢力の力学が働いている。南部の抵抗を排して公民権運動を推し進めたのは連邦政府だったし、中絶や同性愛といった私的領域で白人保守層の信仰を踏みにじる憲法判断をしたのも連邦最高裁だったからである。先進諸国の中でアメリカだけに見られるあの特異な進化論拒否も、科学への反対というより、家庭教育に介入する連邦権力への政治的な反対である。こうして見てゆくと、今次中

象徴・信念の国柄示す

問選挙の「ティーパーティー運動」にも、宗教と人種の微妙な線引きがあることがわかってくる。だが、そもそもなぜアメリカはかくも宗教的なのか。この問いに「いやそれはピューリタン入植以来の歴史だから」と答えるのは、実は不正解である。そのような前史にもかかわらず、アメリカは政教分離による史上初の「世俗国家」として成立した。そして、まさにその政教分離こそが、今日も公私両面にわたって見られるアメリカの豊かな

な宗教性表出を可能にしているからである。このからくりを理解している人は、専門家にも多くない。

●歴代大統領の信仰

藤本龍児『アメリカの公共宗教』（NTT出版・09年）は、トクヴィルやテイラーを引用しつつ、この点をいねいに解説してくる。宗教を前世紀の遺物と考える近代啓蒙主義は、世界的な宗教復興を前に潰え去ったが、現代宗教の行方は私的領域に限定されているわけではない。著者はベラーの「市民宗教」という用語を「公共宗教」と読み替えて、このもっとも世俗化しているはずの国に満ちあふれる宗教の社会的な実相を解説する。本書は、ネ

オコンや宗教右派といった政治現象ばかりでなく、それらを下支えしてきたリバイバル（信仰復興）の歴史やニューエイジ運動といった大衆の宗教性、さらにはコミュニティアニズムの政治哲学や文化多元主義の軋轢にも触れており、一冊で何度もおもしろい便利な解説書となっている。



もっとも世俗化しているはずの国に宗教が満ちあふれている  
イラスト・よしおか じゅんいち

なお、宗教右派の退潮と近年注目される「宗教左派」のことを知るには、堀内一史『アメリカと宗教』（中公新書・10年）の終章あたりを覗くとよい。また、日本では大統領の飼う犬の名前ほどにも興味を持たれていないことだが、栗林輝夫『アメリカ大統領の信仰と政治』（キリスト新聞社・09年）は、ワシントンからオバマまでの大統領の信仰と政治の関係を紹介してくれる。まことに、アメリカ合衆国は壮大な象徴と信念の体系である。